亡き母の思い出など

大町市教育長　荒井　今朝一

今年の三月二十六日に九十七歳で母がこの世を去りました。体が不自由でしたので、三年ほど前から隣村の特別養護老人ホームへ入所していました。当日の朝、熱があり様態が悪いとの連絡を受け、妻と二人で駆け付けたのは午前十時頃でした。新型コロナウイルスのために昨年の暮れから面会できず、心配していたところでしたが、病室へ入ったときには既に話ができる状態ではなく、私たちが見守る中で静かに息を引き取りました。気丈だった母にしては余りにもあっけない最後でした。コロナウイルスに配慮したあわただしい葬儀を終え、母の居室を片付けながら古い写真や日記を見るたびに、幼かった日々の記憶が鮮やかによみがえってきました。

母は、三人兄弟の末娘でしたが、姉は幼いころ病死し、二歳年上の兄は戦死、母自身も十八歳の時に右足を大腿切断する大病を患い、義足に頼る身でした。心身に大きな負担を負いなが

らも生来負けず嫌いで、田植え時には健常者と一緒に水田で苗取りをし、畔切りや畔塗りまでしました。それでも時々「健康なら自転車にも乗り、どんなスポーツもできるのに」と嘆き、時には睡眠中にうなされることもありました。

家系を継ぐことが大事とされた時代、祖父母は、一人娘となった母に何とか養子を迎えようとしたようです。そのかいあってか、昭和二十五年冬に父を養子に迎えることができました。父が二十九歳、母が二十八歳で当時としては遅い結婚でした。翌年、私が生まれ、続いて弟二人と妹が誕生し、私たち四人に生を授けてくれました。当時、我が家は経済的にも大変だったとのこと、ハンディを抱えた母のもとへ父はよく養子に入ったものだと思います。

我が家は、五十戸余りの山間集落で一・五ヘクタールほどの水田農業を営んでいました。父は電気工事士で、近在の工務店に勤めながらの兼業農家でした。母は、不自由な右足を引きずりながら、農業や家事に精を出し、父を助けていました。私が中学生の頃までは、祖父母の他に曾祖母も健在で総勢九人の大家族でした。母は、よく「毎日お米が二升ずつ減っていく」とつぶやきながら食事の用意をしていました。大晦日には、家族全員が、神棚の前にお膳を並べましたが、囲炉裏やこたつの他には火の気もない何とも寒い生活でした。

私が小学校一年生のとき、新しい物好きの父は当時珍しいテレビを買いました。十四インチ

の小さな白黒画面でしたが、プロ野球中継や歌謡ショーの時間帯には近所から大勢集まり、さながら「ミニシアター」でした。兄弟がいない母は、親類縁者が来たときは嬉しそうでしたが、他人には不機嫌そうで、私はそれが嫌でした。

山間地のために小学校四年生まで分校で生活し、五年生から本校に通いました。授業参観には、不自由な母の代わりに父が作業着で駆けつけてくれました。着飾った学友の母親が羨ましかったのですが、今となっては父に感謝しています。

四人兄弟の長男で生活も楽でなく、父は、私が高校を卒業したら一緒に電気工事の仕事に就くか、地元企業に就職することを願っていました。しかし、私は何とか大学進学したいと思っていました。そんな時、母は縫製工場でパートしながら父を助け、お蔭で地元の国立大学に入学することができました。大学卒業後は地元の市役所に就職し、二十七歳で結婚しました。翌年に長男が誕生し、四十一年が過ぎました。昭和六十一年には祖父が、平成六年には父も一年近い闘病生活の後に七十一歳で亡くなりました。言い争いの絶えない夫婦でしたが、母は不自由な足を引きずりながら毎日のように病院に通い、父の看病をしていました。

母が歩くのが困難になったのは、八十五歳を過ぎた頃でした。不自由な体を支えていた左足が負担に耐え切れなくなったとのこと、妻は居室まで食事を運び、デイサービスを活用しなが

らの家庭介護でした。

平成二十八年、妻が急病で入院し、私も首の手術を受けることになり、やむなく特別養護老人ホームへ入所することにしました。母には入所ではなく入院ということにしてあったのですが、妻と面会に行くたびに、妻に感謝するよう私に諭す一方で、「家に帰りたい」と訴えて私たちを困らせました。

平凡なようでも筆舌（ひつぜつ）に尽くしがたい紆余曲折や波乱もありましたが、しかし今、私たち四人を生み、育ててくれた母の愛情と逞しさに感謝せずにはおれません。「家」とか「絆」とかいう概念は古いかもしれませんが、断絶寸前であった我が家は母のお陰で繋がり、今では孫が九人、曾孫が十一人にまで広がっています。本当にありがたい限りです。

あらい・けさいち……長野県大町市教育長。信州大学理学部卒業後、大町市役所職員として山岳博物館学芸員補、市史編纂室主事、長野県出向、都市計画国営公園対策課長、産業建設部長、民生部長などを経て平成二十一年から現職。信濃史学会会員、仁科路研究会会員。